ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	鈴木　とも恵

主な担当科目	実技個人レッスン[声楽Ⅰ①,声楽Ⅰ②,声楽Ⅰ③,声楽Ⅰ④,音楽芸術表現実技（声楽）①②,博士特別表現研究②]
シラバス	次ページをご参照ください

2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	個々のレベル、モチベーションの高さに合わせた指導を心掛けた。毎回のレッスンでの問題点を理解し、改善方法を提示し、積み重ねて行くことで、達成感を感じられるレッスンを目指す。
2022年の教育に関する自己評価	個々の実技の成長と共に、歌唱する事の楽しさ、オペラや歌曲の世界への関心が高まっていることを実感している。

2022年のFD活動に関する自己評価	FD研修会では他の学内組織や非常勤の先生方から、学生の問題や授業の運用上の問題を共有できる貴重な機会である。積極的に意見を交換し、専任の先生方とFDで提示された問題点に取り組む。
授業改善のために取り入れた研修内容	本年度は学生募集の広報について意見交換が積極的に行われた。全国のレスナーを専任教員で把握し、大学のアプローチを全国にむけていくべきであると再認識する。

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とブレス
第18回	発声練習と身体の使い方 (開口母音)
第19回	発声練習と身体の使い方 （閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読だけではなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
歌詞の意味を調べ音読すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集　その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とブレス
第18回	発声練習と身体の使い方 (開口母音)
第19回	発声練習と身体の使い方 （閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
歌詞の意味を調べ音読すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集　その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とブレス
第18回	発声練習と身体の使い方 (開口母音)
第19回	発声練習と身体の使い方 （閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読だけではなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
歌詞の意味を調べ音読すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集　その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とブレス
第18回	発声練習と身体の使い方 (開口母音)
第19回	発声練習と身体の使い方 （閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
歌詞の意味を調べ音読すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集　その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	1～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とブレス
第18回	発声練習と身体の使い方 (開口母音)
第19回	発声練習と身体の使い方 （閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
歌詞の意味を調べ音読すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集　その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	2～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア古典歌曲に加え、イタリアベルカントの代表的作曲家及びVerdiの歌曲まで時代を広げて勉強する。実技試験課題は、前期「イタリア古典歌曲又はRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」後期「Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲（4分以内）」　実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

① 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
②イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法と様式感を理解することができる。
③イタリアベルカントの代表的な作曲家（Rossini,Donizetti,Bellini）及びVerdiの室内歌曲のレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回　呼吸、発声練習
第2回　共鳴、身体の使い方の練習
第3回　イタリア語ディクション（音読）
第4回　イタリア語ディクション（歌唱）
第5回　正確な音程とリズム
第6回　イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第7回　イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回　イタリア語（レチタティーヴォを含む）の正しい発音と歌い方
第9回　歌詞の理解
第10回　歌詞の表現
第11回　時代・様式にあった音楽づくり
第12回　時代・様式にあった表現方法
第13回　前期試験曲の伴奏合わせ
第14回　前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回　前期試験に向けての総合練習

第16回　呼吸、発声技術の向上
第17回　共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回　イタリア語ディクションとポジション（音読）
第19回　イタリア語ディクションとポジション（歌唱）
第20回　正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回　Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第22回　Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第23回　イタリア語（レチタティーヴォを含む）の正しい発音と歌い方の向上
第24回　歌詞の理解力の向上と表現
第25回　歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回　時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回　時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回　後期試験曲の伴奏合わせ
第29回　後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回　後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、 Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	2～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリアベルカントの代表的作曲家及びVerdiまでの室内歌曲の他、日本歌曲、オペラアリアまでを学生の進度、能力に合わせて学んでいく。
実技試験は前期「Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」　後期「日本歌曲と自由曲(イタリア語のもの)各1曲(7分以内)」　実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

① 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
②イタリアベルカントの代表的な作曲家（Rossini,Donizetti,Bellini）及びVerdiの室内歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。
③日本歌曲のレパートリーを作ると同時に、詩や曲を通じて日本人の心を深く味わい、それを表現することができる。

授業展開と内容

第1回　呼吸、発声練習
第2回　共鳴、身体の使い方の練習
第3回　イタリア語ディクション（音読）
第4回　イタリア語（歌唱）
第5回　正確な音程とリズム
第6回　イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第7回　イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回　イタリア語（レチタティーヴォを含む）の正しい発音と歌い方
第9回　歌詞の理解
第10回　歌詞の表現
第11回　時代・様式にあった音楽づくり
第12回　時代・様式にあった表現方法
第13回　前期試験曲の伴奏合わせ
第14回　前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回　前期試験に向けての総合練習

第16回　呼吸、発声技術の向上
第17回　共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回　イタリア語・日本語 ディクションとポジション（音読）
第19回　イタリア語・日本語 ディクションとポジション（歌唱）
第20回　正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回　Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲、オペラアリア及び日本歌曲の様式感
第22回　Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲、オペラアリア及び日本歌曲の演奏法
第23回　イタリア語（レチタティーヴォを含む）・日本語の正しい発音と歌い方の向上
第24回　歌詞の理解力の向上と表現
第25回　歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回　時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回　時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回　後期試験曲の伴奏合わせ
第29回　後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）

第30回　後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、 Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲集、日本歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	2～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア古典歌曲に加え、イタリアベルカントの代表的作曲家及びVerdiの歌曲まで時代を広げて勉強する。実技試験課題は、前期「イタリア古典歌曲又はRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」後期「Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲（4分以内）」　実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

① 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
②イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法と様式感を理解することができる。
③イタリアベルカントの代表的な作曲家（Rossini,Donizetti,Bellini）及びVerdiの室内歌曲のレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクション（音読）
第4回	イタリア語ディクション（歌唱）
第5回	正確な音程とリズム
第6回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第7回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回	イタリア語（レチタティーヴォを含む）の正しい発音と歌い方
第9回	歌詞の理解
第10回	歌詞の表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回	イタリア語ディクションとポジション（音読）
第19回	イタリア語ディクションとポジション（歌唱）
第20回	正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第22回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第23回	イタリア語（レチタティーヴォを含む）の正しい発音と歌い方の向上
第24回	歌詞の理解力の向上と表現
第25回	歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回	時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回	時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、 Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ③

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	3～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。2年次までの歌曲に加え、学生個々の能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲など範囲を広げて学んでいく。実技試験課題は、前期・後期とも「自由曲1曲(イタリア語のもの)(5分以内）※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」
試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を向上させることができる。
②各々の楽器(声)に合った歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を身につけることができる。
③レチタティーヴォの歌い方を覚え、身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　呼吸、発声練習
第2回　共鳴、身体の使い方の練習
第3回　イタリア語ディクション（音読）
第4回　イタリア語ディクション（歌唱）
第5回　レチタティーヴォの歌い方（レチタティーヴォ・セッコ）
第6回　レチタティーヴォの歌い方（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第7回　カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回　アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回　歌詞・作品の理解
第10回　歌詞・作品の理解と表現
第11回　時代・様式にあった音楽づくり
第12回　時代・様式にあった表現方法
第13回　前期試験曲の伴奏合わせ
第14回　前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回　前期試験に向けての総合練習

第16回　呼吸、発声技術の向上
第17回　共鳴、身体の使い方の向上
第18回　イタリア語ディクションの向上（音読）
第19回　イタリア語ディクションの向上（歌唱）
第20回　レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・セッコ
第21回　レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第22回　カデンツァ・修飾音などの歌い方（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第23回　アジリタ・ポルタメントなどの歌い方（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第24回　歌詞・作品の理解力の向上
第25回　歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回　時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回　時代・様式にあった表現方法の向上
第28回　後期試験曲の伴奏合わせ
第29回　後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回　後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ③

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	3～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。2年次までの歌曲に加え、学生個々の能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲など範囲を広げて学んでいく。実技試験課題は、前期・後期とも「自由曲1曲(イタリア語のもの)(5分以内）※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」
試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を向上させることができる。
②各々の楽器(声)に合った歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を身につけることができる。
③レチタティーヴォの歌い方を覚え、身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクション（音読）
第4回	イタリア語ディクション（歌唱）
第5回	レチタティーヴォの歌い方（レチタティーヴォ・セッコ）
第6回	レチタティーヴォの歌い方（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクションの向上（音読）
第19回	イタリア語ディクションの向上（歌唱）
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・セッコ
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ④

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	4～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。学生個々の声種・能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲、日本歌曲など幅広いレパートリーを学んでいく。
実技試験課題は、前期「自由曲1曲(イタリア語のもの)(6分以内）※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」後期「イタリア歌曲または日本歌曲と自由曲（イタリア語）各1曲（10分以内）」　　試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を更に向上させることができる。
②各々の楽器(声)に合った歌曲（日本歌曲を含む）やオペラアリアのレパートリーを作り、様式感のある演奏法と表現力を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　呼吸、発声技術の向上
第2回　共鳴、身体の使い方の向上
第3回　イタリア語ディクション力の向上（音読）
第4回　イタリア語ディクション力の向上（歌唱）
第5回　レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・セッコ）
第6回　レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第7回　カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上
第8回　アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上
第9回　歌詞・作品の理解力の向上
第10回　歌詞・作品の理解と表現力の向上
第11回　時代・様式にあった音楽づくりの向上
第12回　時代・様式にあった表現方法の向上
第13回　前期試験曲の伴奏合わせ
第14回　前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回　前期試験に向けての総合練習

第16回　呼吸、発声技術の更なる鍛錬
第17回　共鳴、身体の使い方の更なる鍛錬
第18回　イタリア語・日本語 ディクション力の習得（音読）
第19回　イタリア語・日本語 ディクション力の習得（歌唱）
第20回　レチタティーヴォの歌い方の習得（レチタティーヴォ・セッコ）
第21回　レチタティーヴォの歌い方の習得（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第22回　カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第23回　アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第24回　歌詞・作品の理解力の習得
第25回　歌詞・作品の理解と表現力の習得
第26回　時代・様式にあった音楽づくりの習得
第27回　時代・様式にあった表現方法の習得
第28回　後期試験曲の伴奏合わせ
第29回　後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回　後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。
実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ④

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
実技・実習	4～	通年	6

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。学生個々の声種・能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲、日本歌曲など幅広いレパートリーを学んでいく。
実技試験課題は、前期「自由曲1曲(イタリア語のもの)(6分以内）※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」後期「イタリア歌曲または日本歌曲と自由曲（イタリア語）各1曲（10分以内）」　　試験の点数をもって評価とする。

学修成果

①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を更に向上させることができる。
②各々の楽器(声)に合った歌曲（日本歌曲を含む）やオペラアリアのレパートリーを作り、様式感のある演奏法と表現力を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　呼吸、発声技術の向上
第2回　共鳴、身体の使い方の向上
第3回　イタリア語ディクション力の向上（音読）
第4回　イタリア語ディクション力の向上（歌唱）
第5回　レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・セッコ）
第6回　レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第7回　カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上
第8回　アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上
第9回　歌詞・作品の理解力の向上
第10回　歌詞・作品の理解と表現力の向上
第11回　時代・様式にあった音楽づくりの向上
第12回　時代・様式にあった表現方法の向上
第13回　前期試験曲の伴奏合わせ
第14回　前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回　前期試験に向けての総合練習

第16回　呼吸、発声技術の更なる鍛錬
第17回　共鳴、身体の使い方の更なる鍛錬
第18回　イタリア語・日本語 ディクション力の習得（音読）
第19回　イタリア語・日本語 ディクション力の習得（歌唱）
第20回　レチタティーヴォの歌い方の習得（レチタティーヴォ・セッコ）
第21回　レチタティーヴォの歌い方の習得（レチタティーヴォ・アッコンパニャート）
第22回　カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第23回　アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第24回　歌詞・作品の理解力の習得
第25回　歌詞・作品の理解と表現力の習得
第26回　時代・様式にあった音楽づくりの習得
第27回　時代・様式にあった表現方法の習得
第28回　後期試験曲の伴奏合わせ
第29回　後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回　後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。
体調管理を怠らないこと。
実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。
レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。
毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日１～２時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

博士特別表現研究②　ヴァイオリン

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

「博士研究指導」においてオーソライズされた研究計画に従って、声楽の分野の実践的研究を行う。実技のレッスンを主体としつつ、それに関連する歌唱法研究等を行う。年度末には当年度を総括する研究演奏による研究発表を行い、評価を受ける。

学修成果

修士課程までの研鑽の成果や個人の能力・資質に基づいて、きわめて高度な演奏技術の習得と向上を図ることができる。

授業展開と内容

第1回　個人レッスンを通した演奏法研究等（1）１年間の計画の立案、研究対象楽曲の決定

第2回　個人レッスンを通した演奏法研究等（2）研究対象楽曲①に関する声楽の見地からの考察

第3回　個人レッスンを通した演奏法研究等（3）研究対象楽曲①に関する発声の問題点を取り上げる

第4回　個人レッスンを通した演奏法研究等（4）研究対象楽曲①に関する発声を中心とした効果的な表現法

第5回　個人レッスンを通した演奏法研究等（5）研究対象楽曲①に関する演奏解釈

第6回　個人レッスンを通した演奏法研究等（6）研究対象楽曲①に関する演奏法研究

第7回　個人レッスンを通した演奏法研究等（7）研究対象楽曲①に関する全体の曲分析

第8回　個人レッスンを通した演奏法研究等（8）研究対象楽曲①に関する全体の演奏法

第9回　個人レッスンを通した演奏法研究等（9）研究対象楽曲②に関する声楽の見地からの考察

第10回　個人レッスンを通した演奏法研究等（10）研究対象楽曲②に関する発声の問題点を取り上げる

第11回　個人レッスンを通した演奏法研究等（11）研究対象楽曲②に関する発声を中心とした効果的な表現法

第12回　個人レッスンを通した演奏法研究等（12）研究対象楽曲②に関する演奏解釈

第13回　個人レッスンを通した演奏法研究等（13）研究対象楽曲②に関する演奏法研究

第14回　個人レッスンを通した演奏法研究等（14）研究対象楽曲②に関する全体の曲分析

第15回　個人レッスンを通した演奏法研究等（15）研究対象楽曲②に関する全体の演奏法

第16回　個人レッスンを通した演奏法研究等（16）研究対象楽曲③に関する発声を中心に取り上げる

第17回　個人レッスンを通した演奏法研究等（17）研究対象楽曲③に関する声楽の見地からの考察

第18回　個人レッスンを通した演奏法研究等（18）研究対象楽曲③に関する発声を中心とした効果的な表現法

第19回　個人レッスンを通した演奏法研究等（19）研究対象楽曲③に関する演奏解釈

第20回　個人レッスンを通した演奏法研究等（20）研究対象楽曲③に関する演奏研究

第21回　個人レッスンを通した演奏法研究等（21）研究対象楽曲③に関する全体の曲分析

第22回　個人レッスンを通した演奏法研究等（22）研究対象楽曲③に関する全体の演奏法

第23回　個人レッスンを通した演奏法研究等（23）研究対象楽曲④に関する声楽の見地からの考察

第24回　個人レッスンを通した演奏法研究等（24）研究対象楽曲④に関する発声の問題点を取り上げる

第25回　個人レッスンを通した演奏法研究等（25）研究対象楽曲④に関する発声を中心とした効果的な表現法

第26回　個人レッスンを通した演奏法研究等（26）研究対象楽曲④に関する演奏解釈

第27回　個人レッスンを通した演奏法研究等（27）研究対象楽曲④に関する演奏法研究

第28回　個人レッスンを通した演奏法研究等（28）研究対象楽曲④に関する全体の曲分析

第29回　個人レッスンを通した演奏法研究等（29）研究対象楽曲④に関する全体の演奏法

第30回　個人レッスンを通した演奏法研究等（30）年次研究演奏発表に向けての仕上げ

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。単に技術の向上のみならず、多角的な作品の追及を目指すという意識を持って履修すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業外の時間で個人練習の時間を確保し、十分な研究をしてレッスンに臨むこと。

教科書・参考書

必要に応じて指示する。

科目名－クラス名

博士特別表現研究②　作曲

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	100	0	0	100

教育到達目標と概要

2年次に開講する。「博士研究指導」においてオーソライズされた研究計画に従って、作曲及び関連分野の実践的研究を行う。年度末には当年度を総括する研究作品提出を行い、評価を受ける。

学修成果

①の成果に基づいて、より一層高度な技術の修得と、それに裏打ちされた創作の深化を図ることができる。

授業展開と内容

第1回　作曲構想の研究①導入

第2回　作曲構想の研究②実践

第3回　作曲構想の研究③まとめ

第4回　作曲構想に関わる資料の研究①導入

第5回　作曲構想に関わる資料の研究②実践とまとめ

第6回　作曲構想の原案の作成準備

第7回　作曲構想の原案の作成①導入

第8回　作曲構想の原案の作成②実践

第9回　楽器編成等の設定（オーケストラ、声楽等）

第10回　音楽形式、音素材の設定

第11回　作曲の実践①導入

第12回　作曲の実践②構想に基づいたスケッチ

第13回　作曲の実践③楽器編成等の設定に基づいたアレンジ

第14回　作曲の実践④スコア浄書またはメディア作成

第15回　まとめ

第16回　作曲構想の再検討

第17回　作曲構想の原案の修正

第18回　作曲した部分の再検討

第19回　作曲した部分の修正

第20回　再検討に基づく作曲の実践①導入

第21回　再検討に基づく作曲の実践②構想の検討

第22回　再検討に基づく作曲の実践③原案の修正

第23回　再検討に基づく作曲の実践④構想に基づいたスケッチ

第24回　再検討に基づく作曲の実践⑤スケッチの改善

第25回　再検討に基づく作曲の実践⑥楽器編成等の設定に基づいたアレンジ

第26回　再検討に基づく作曲の実践⑦アレンジの改善

第27回　再検討に基づく作曲の実践⑧スコア浄書またはメディア作成の導入

第28回　作品の楽譜等の作成

第29回　作品解説の作成

第30回　まとめと年次研究作品提出に向けての仕上げ

履修上の注意

毎回のレッスン以外でも常に担当教員と連絡をとり、研究の進捗状況を報告すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

レッスンで指導された内容を研究し、作曲に生かし、実践に励むこと。

教科書・参考書

作曲の構想に関わる資料としてレッスン時に指示する。

2021 年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1731　教員名：鈴木　とも恵

１）授業結果に対する所見

門下生は計 14 名で、大学院 2 名、博士課程 1 名、計 10 名がアンケートに答えている。特に気になる結果として、設問５の自分の出席状況がよくないに対して、思わない１，少し思うが 4 名いた。原因として考えれるのは、コロナ禍という事もあり、体調がすこしでもすぐれないときは、注意をして欠席をするする事が影響しているのではないかと考える。

設問８の予習、復習をしているに対し、2 名が少し思うと答えているが、今後、自ら、練習がしたいと思える、レッスンを心掛けたい。

２）要望への対応・改善

設問 10 にある自分は満足しているに対して全員がそう思うに回答しているが、今後、更に指導法の向上、学生の研究心が高まるレッスンを提供したい。

３）今後の課題

一人一人に合った、メソドや心理状態に気を付けながら寄り添った、指導法を目指したい。勉強会等を増やし、其々の演奏を聴き合い、技術向上に役立てる機会を多く持たせたいと考える。